

# ちば里山新聞

(第19号)

編集 発行 ちば里山センター  
 袖ヶ浦市長浦拓2号 580-148  
 電話 0438-62-8895  
 題字 倉島 貴浩  
 (ワークホーム里山の仲間たち)

## 第6回 里山フェスティバル開催

地球温暖化防止、生物多様性保全など地球環境に対する関心が集まる今だから

◎里山体験 ☆里山シンポジウム に参加しましょう。

美しい千葉県の里山を守るため「里山条例」では、5月18日を「里山の日」と定めています。  
 この「里山の日」に、広く県民に里山に対する関心と理解を深めるために、今年も実施します。

### ◎4つの里山体験コース

	コース名	日時	送迎バス 定員	現地集合 定員	送迎バスの 集合場所・時間
			参加費	参加費	
1	植樹体験と今シーズン最後の イチゴ狩りコース (山武市)	5月9日(土) 10時~15時	40人	10人	8時: NTT千葉支店前 (JR千葉駅から徒歩5分) →9時: JR外房線大網駅ロータリー→現地
			1000円	500円	
2	米沢の森で里山活動と ハイキング・自然観察コース (市原市)	5月10日(日) 10時~15時	40人	10人	8時30分: NTT千葉支店前 (JR千葉駅から徒歩5分) →9時20分: JR内房線五井駅東口→現地
			500円	無料	
3	森林整備と田園空間「まほろ ばの里」で採れたてマッシュ ルームを味わうコース (香取市)	5月16日(土) 10時~15時	40人	20人	8時: NTT千葉支店前 (JR千葉駅から徒歩5分) →9時: JR成田線佐原駅北口→現地
			500円	無料	
4	「南房総おんだら山」~里山 活動とわらじづくり体験コ ース~ (南房総市)	5月24日(日) 10時~15時	40人	20人	7時15分: NTT千葉支店前 (JR千葉駅から徒歩5分) →8時15分: JR内房線君津駅南口→現地
			500円	無料	

#### (申込方法・申込先) ※申込み多数の場合は、抽選といたします。

参加を希望される方は、往復はがき(1通につき1コース)に、①希望するコース名、②参加者全員(1通につき4名まで)の氏名、  
 ③住所、④年齢、⑤電話番号、⑥送迎バス利用の有無と乗車駅名、返信用あて先を書いて、下記申込先まで郵送してください。  
 (締切り 4月24日(金)消印有効)

申込先 〒299-0265 袖ヶ浦市長浦字拓2号580-148 ちば里山センター

(問合せ) 電話 0438(62)8895 ホームページアドレス <http://www.satochiba.jp>

### ☆里山シンポジウム

テーマ 里山に託す私たちの未来

~里山と食料・水・木材~

- ・開催場所 佐倉市志津コミュニティセンター(佐倉市井野794-1)  
京成本線ユーカリが丘駅からユーカリが丘線に乗換「公園」駅下車徒歩4分
- ・日時 平成21年5月17日(日) 12時30分から17時まで
- ・内容 パネルディスカッション「里山と食料・水・木材」  
パネラー: 食料・田中素子氏、水・嶋津暉之氏、木材・伊藤道男氏
- ・主催 里山シンポジウム実行委員会、千葉県、佐倉市、(社)千葉県緑化推進委員会、ちば里山センター
- ・問合せ先 里山シンポジウム実行委員会事務局 Tel. 03(3824)6071(荒尾方)  
ホームページアドレス <http://www.satochiba.jp>

# 平成20年度 里山活動発表会開催

— 独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金助成事業 —

平成21年3月8日（日）千葉市農政センターに於いて

約140名参加

ちば里山センター会員・企業・一般県民・行政関係者・学生などが一同集まり活動事例発表、意見交換の場として毎年開催するもので、今年は千葉市のご厚意により農政センターを会場とし、実施しました。

今年の事例発表資料はちば里山センター運営委員が直接発表者の活動場所に出向き、千葉自然学校の協力のもと事前取材から編集まで行い作成しました。グループ討議は「地域の役割と連帯」「維持管理と存続」「新たなニーズと可能性」「環境保全と生物多様性」の4つに分かれ最後に各々のグループでどのような討議がされたかグループの代表が発表し、終了しました。



6団体・企業による活動の事例発表

発表会で使用したパワーポイントの発表資料は事前取材を行い、千葉自然学校の協力でちば里山センターが作成しました。  
(現地での取材風景と協力してくれた千葉自然学校の2人)



## ○4つに分かれてのグループ討議

グループ討議の意見は今後のちば里山センターの運営の参考にすると共に、「美しいちばの森林づくりタウンミーティング」として県の施策に反映されます。



Aグループ 「地域の役割と連帯」



Bグループ 「維持管理と存続」



# 会員団体紹介

## <カタクリを巡るあれこれ>

平成17年4月早春に、市原市喜多の里山でカタクリに出会い、復元作業を始めて以来、この春で5年を迎えます。あっという間の5年間でした。会員達の作業の頑張りでも毎年、着実に花の数が増え、昨年の春には200余りの花が見られ、ようやくカタクリ自生地らしい里山になりました。

素人だけの試行錯誤に始めた復元作業ですが、毎年増える花数に、なんとなく作業の方法にも自信が持てたよう思います。地球温暖化が顕著な今年の暖冬が過ぎ、今春は一体どのくらいの花芽を付けてくれるのか期待と不安でいっぱいです。そんな中で、お手本にし、相談にものってもらっている千葉の泉自然公園のカタクリの一枚葉が見られるとのニュースがこの2月21日に届き、気が焦ります。

5年前に、2～3輪のカタクリにであった感激は今も忘れられません。それほどに千葉では貴重な花です。周囲は盗掘の跡が点在していて、それを嘆く仲間うちで「保護したいね」、との話から、現在の当会の存在につながっています。地主さんのご厚意により、入山許可を得、真竹、シノタケで覆われていた雑木林の里山を少しずつ伐採、間伐等の作業をしながら、又、並行して、市へのカタクリ保護の必要性を訴え、その翌年には、正式にカタクリ保護保全する会として発足しました。会の充実を図るために、会員を増やしていき、活動資金を得るために奔走してきました。ほとんど女性だけの会でしたから、間伐は他の団体に丸抱えでお世話になり、カタクリの花の勉強は泉自然公園で教えていただくなど、幾多の多くの諸先輩、諸団体にお世話になりました。作業を続けて数年を経ると地元住民からも理解されるようになり、協力の手をさしのべて下さるようになり、とても達成感を味わいました。今では、会員は20名を超え、男性会員も入会し、活動に必要な工具等は充実しつつあり、念願の会として立派に成り立つと思うようになりました。

千葉県はカタクリが生存していける南限といわれて、とても貴重な花として千葉市泉自然公園、昭和の森公園等でその群生地は大事に保護されています。又、柏市では市の花と制定され、逆井のカタクリ群生地は有名です。ここ風呂の前のカタクリ自生地も地域の貴重な自然、花を楽しむ里山・カタクリ自生地として、これからも地域の方々と協力して保護活動をしていきたいと、会で再確認しております。

## 風呂の前里山保存会



「風呂の前里山保存会」の概要				
代表	設立年月日	会員数	活動地	活動日
中山美代子	平成18年 6月25日	23名(女性会員が多い) ※男性会員を募集中	市原市喜多	原則: 毎月第一月曜日、第三月曜日 臨時日: 開花時は見張り・見回り(盗掘対策)

千葉県森林課  
伊藤課長の

## 里山整備保全活動を語る 第4回

里山整備保全活動に対し日頃から感じておられたことを4回シリーズで掲載し、今回が最終です。

### 里山活動と外部経済

3月8日には里山センター主催の里山活動発表会があり、会場からあふれるばかりの参加者で、内容も充実したものでした。さまざまな里山行事に参加して、参加者の「思い」や「熱さ」に触れるたびに、「行政も」と気持ちを新たにしています。

先日も“里山はかつての薪炭林・農用林としての存在価値を失ったので荒れている。我々は「新たな存在価値」を探して試行錯誤を繰り返しているが、難しい問題が多い。”との発言を皮切りに、さまざまな視点からの発言がありました。それを聞きながら久しぶりに外部経済という言葉思い出しました。立正大学の福岡克也氏が、森林の公益的機能の価値を経済的に評価し、外部経済の概念で論じて話題になったのは30年以上前のことです。その当時、既に、林業活動は経済行為としては一部でしか成り立たなくなっていました。その結果、「森林の持つ公益的機能は人間にとって不可欠なもの」との評価が高まりながら、森林を管理する林業活動（林業者）には市場を通して対価が払われず、補助金が頼りといった矛盾が顕在化していました。

その後、数多くの施策が展開されましたがこの構図は変わることなく、現在では、二酸化炭素吸収源、水源涵養などの公益的機能の高度発揮が森林に与えられた最優先課題となり、それを支えるため森林環境税が30県で導入されるまでになりました。最近では所有と利用の分離、あるいは森林の社会的管理といった概念まで語られるようになっていきます。森林ボランティア、里山活動なども意識するかしないかは別にして、この流れの中にあることは否定できません。

冒頭の「新たな存在価値」に話が戻りますが、もし何らかの経済性を期待するなら、当然のことながら経済原理に従うしかなく、それなりの覚悟は必要です。市場（世間）から求められるニーズに応じて、商品（フィールド）やサービス（プログラム）を磨きあげ、他との競争に打ち勝つ努力を続けるしかありません。既に、桜の名所や森林セラピー活動などの一部にその気配が感じられます。この場合は、もし二酸化炭素吸収に特化した市場が生まれれば、生長の早いスギ・ヒノキ植栽が一番合理的であるということになります。

一方、「新たな存在価値」を地域コミュニティの再生、生物多様性の確保、生涯学習といったものとするなら、パートナーシップにより新たな「公」を作り出す活動になり、これもまたそれなりの覚悟を持って対処する必要があります。活動団体としての説明責任が求められますし、人、物、金の苦労は避けては通れないでしょう。（特定のメンバーで秘密の花園とするなら別ですが・・・）個人的には、誰でも興味を持ちそれなりの思いがある「食」、「健康」、「教育」を里山整備活動の付加価値とすることで広がりが出やすいのではと感じています。いずれにしろ、明確な方針や志を掲げる一方で、地域の実態を踏まえて、やれることからやるしかありません。各地の行事に参加して情報と元気をもらう必要は当分続きそうです。

4回にわたり、つたないコラムにお付き合いいただきありがとうございました。「何を書いてもいい」ことがこんなに難しいものとは知りませんでした。次は紙面でなく現場でお会いしましょう。



海から上がったみこしが松林の中の広場に集まる  
一宮玉前神社の神事  
白砂青松の景観と地域文化の融合